

アンドルー・マーヴェルとスタンリー・サークル¹

松崎 毅

序

詩人 Andrew Marvell (1621-1678) は、第一次内乱の期間をある貴族の子弟たちの家庭教師として大陸で過ごし、1647年にイギリスに帰国した。ロンドンの法曹学院 (Inns of Court) の近くに居を定めた彼は、以降1650年までのあいだ、自らも詩人・学者で王党派詩人たちのパトロンでもあった Thomas Stanley の主催する文学サークルと交流を持ちながら詩作に励んだと思われる (Augustine 51)。Nicholas McDowell は、このスタンリー・サークルとマーヴェルの関係について詳細な論考を著したが、彼も認めるとおり、その交流を裏付けるものは、基本的には、彼らの詩文にしばしば見られる類似と模倣の跡であり、残念ながら、物理的・客観的な裏付けはほぼ存在しない (3)。ただ、マーヴェルがこの時期、王党派の貴族・軍人の死を悼むエレジーや、代表的な宮廷人であった Richard Lovelace の詩集への推奨詩を書いていることから、彼の政治信条もまた王政主義に傾いていたであろうということが一般に信じられている。また、この前提から同時に導かれるのは、マーヴェルが共和制支持を初めて打ち出した “An Horatian Ode upon Cromwell’s Return from Ireland” (1650、以下 “Ode” と略記) の執筆をもって政治的「変節」を遂げたという推定である。いや、「推定」は控えめに過ぎるかもしれない。マーヴェル自身でさえ、この詩がもし広く公表されれば、自らに「変節者」の汚名がかかることは十分に意識していたはずであり、だからこそ、この詩は手稿の回覧というかたちでのみ読まれたのであり、1681年の死後出版詩集の、一部の例外を除くすべてのコピーからも削除されたのである。

ただ、マーヴェルについて「変節」を口にするとき、忘れてはならないのは、そこに少なくとも次の二つの前提が働いていることであろう。つまり、第一に、それがあくまでも政治イデオロギーにおけるものであること、そして第二に、内乱期の政治信条が、王党派と議会派、あるいは王政主義と共和主義という二つの極に明確に分かれて対立していたという前提である。そして、近年の批評家の多くが特に力を注いでいるのは、これらの前提自体を突き崩そうとする研究の方向性である。例えば上記のマクダウェルは、その著作全体を通じ、スタンリー・サークルのメンバーがそれぞれの政治イデオロギーにおいて決して一枚岩ではなかったことをつづさに論じている。また、Scott A. Trudell は、このマクダウェルが明らかにしたスタンリー・サークルにおける John Hall の存在意義に触れ、彼の存在は、「大空位時代における詩の文化が、我々の予想以上に、いかに政治的二極化などというものから程遠かったかを示すものだ」(174) と述べている。ホールは優れた詩人であると同時に、1647年以降、議会派の立場から論陣を張ったジャーナリストでもあった。

本論は、近年のこのような研究動向を踏まえたとき、マーヴェルが “Ode” をもって「変節」を遂げたという通説にどのような修正を加えるかを考察する。第一章では、スタンリー・サークルがどのようなメンバーから成り、何を目指して活動していたかを概観する。特に、このサークルを本質的に特徴づけていたものが、政治イデオロギーというより、むしろ文化イデオロギーと呼ぶべき価値観であったことを明ら

かにしたい。続く二つの章は、“Ode”の前後に書かれた二つの詩、“To his Noble Friend Mr Richard Lovelace, upon his Poems”と“Tom May’s Death”をそれぞれ扱い、そこに表れている文化イデオロギーに一貫性が認められることを論じる。もちろん、“Ode”そのものの中にも同様の文化イデオロギーは見取れるが、それはこの前後二作との関連において、それらを論じる中で言及していくつもりである。

1. スタンリー・サークル

マクダウェルによると、トマス・スタンリーはハートフォードシャーの裕福な地主の長男に生まれ、1639年に14歳でケンブリッジ大学ペンブルック・カレッジに入学。1642年に同学の文学修士となった早熟の秀才で、その後4年間を大陸で過ごし、国王チャールズがスコットランド軍に投降した1646年にイギリスに帰国した。帰国後、ロンドンの法曹学院の一つであるミドル・テンブル近辺の数部屋に居を定め、その場所を、国王そして宮廷という最大のパトロンを失い、経済的にも困窮していた当時の王党派詩人たちの拠り所とすべく提供したのである (McDowell 13-15)。また、すでに1641年に、叔父で高名な古典学者であった William Hammond とともにダーラムを訪れたさい、ジョン・ホールという傑出した才能を見出していた彼は、早くも大陸旅行中からパトロンとして彼を支援していたらしく、ホールがケンブリッジ大学に入学してからわずか1年後の1647年に出版した詩集には、スタンリーに対する最大限の謝意が献辞として付されることになった (14)。そして、このホールをはじめとし、彼がパトロンとなり支援をした詩人は枚挙に暇がない。高名な王党派詩人だけでも、上述のラヴレイスをはじめ、James Shirley、Edward Sherburne、Alexander Bromeなどがそこに含まれ、また、何らかのかたちでこのサークルと結びつきのあった詩人としては Robert Herrick そしてマーヴェルが挙げられる (2)。

サークルが目指したものは、一言でいえば、かつて存在し、今は失われつつある宮廷の文学文化の継承である。より具体的には、ギリシア、ローマの古典詩やルネサンスのヨーロッパ詩の翻訳と模倣を通じた新たな詩の創造、またこれらの文学的探究を通じた「宮廷なき世界における古典的美徳の存続」(3) である。その文学文化が、当時爆発的に広まりつつあった大衆の出版文化と明瞭な対照をなすものであったことは明らかであろう。それは、パトロンとの個人的な信頼関係を基礎とし、同等の教養と同質の価値観をもつ一握りのエリート集団の中でのみ共有される文学文化であり、その形態的な特徴は、手稿の回覧が基本的な流通手段だったことである。たしかにスタンリーは、王党派の出版業者 Humphrey Moseley と手を組み、1640年代の後半から1650年代にかけて、彼のサークルに属す王党派詩人の詩集や翻訳を精力的に出版した。しかし、この共同作業は、出版界が粗野で攻撃的なパンフレット戦争の戦場と化すなかで、失われた宮廷文化の理想をかたちとして残し、かつその理想へのノスタルジーを掻き立てるといった政治的な意図をもってなされたのであり (63)、パトロンを中心とする個人的な信頼関係と友愛のなかで互いの詩の技量を高め合うことを主眼とするスタンリーの文学サークルそれ自体にとって、出版は、原理的に言っても、あくまで二次的な流通手段に過ぎなかった。

スタンリーはこのような文化イデオロギーを擁護し促進したが、同時に、彼が王党派の政治イデオロギーにも深く染まっていたことは確かである。彼の文学サークルの中には、そのサブサークルとして、国王の窮状と王党派の敗北を悼むための黒いアームバンドを身につけた「黒リボン団」(the order of the Black Riband) というより政治的な結社が存在しており、マクダウェルは、そのリーダーもまたスタンリー自身であったと推測している (23-24)。

ただし、ここで注意しなければならないのは、この結社そしてサークルにとっての敵が、ひとまとめに

「議会派」の名称で片づけられるような単一の勢力ではなかったことである。よく知られているように、1647年にスコットランド軍がチャールズを議会に売り渡した後、王政存続の妥協案として長老派教会をイングランドの正式な教会制度として導入させようとした議会の多数派である長老派と、主教制をも一つの選択肢として認めつつ、各教会の自律性を尊重することを主眼とするThe Heads of the Proposalsを提案した独立派の主張のあいだには、極めて大きな隔たりが生じていた。

そして、内乱の帰趨を左右するこの重大局面で、議会派側の論客としてパンフレット戦争に加わったのがジョン・ホールである。この年の遅くとも8月には出版されていた彼のパンフレット、*A true account and character of the times, Historically and Politically drawn by a Gentleman to give satisfaction to his friend in the Country* (以下、*A true account*と略記)は、結論だけを述べると、長老派という宗教的権威が、文化や倫理のレベルにおいてまで国民を束縛することを嫌悪し、宗教から切り離された世俗的権力(つまり独立派)こそが国政を掌握すべきことを主張した文書である²。ただ、マクダウェルが述べているとおり、この文書はおそらく「特にスタンリーに向けて」(91)書かれたものであり、また、彼のサークルの大半を占める王党派のメンバーたちに、長老派による国政掌握の危険性を婉曲に警告する意図をもつものであった。実際、この文書にはIndependentsやThe Heads of the Proposalsといった語句は現れないが、“congregational way”(4)という句や、教会の権威は世俗の法と権力の下に従属すべきであるという暗黙の歴史認識が、その意図のありかを示している。また、マクダウェルが特に注目するのは、この文書に王党派からの共感を得るための様々な配慮が施されていた点である。長老派攻撃の理由の一つとして言及されている議会派による王党派の土地接収(sequestration)と買い戻し(compounding)は、たしかに経済的に困窮していた「ラヴレイスあるいはヘリックを念頭に置いていた」(93)ように読めるし、閉鎖されていた劇場の再開を求める彼の主張は、やはりスタンリー・サークルのメンバーで劇作家であったシャーリーやブルームの心に深く刺さったはずである(96)。それだけではない。彼が指摘している、長老派による個人の「良心」の問題への介入、彼らの無教養さと知識そのものの否定、権威を笠に着た私利私欲の追及、その宗教的専制が第二の主教制となることへの潜在的恐怖といった問題は、王党派に対し、国王と長老派の交渉がいかに危険な結末を導くかを、これでもかとばかりに印象付けようとしているのである。

1640年代後半の長老派への反発は、実際、政治的レベルにおける王党派・独立派連合の可能性すら生じさせた。ただ、ホールのパンフレットを読むと、その両者に単なる政略的・便宜的な連合を超えた本質的な近親性、つまり、宗教、学問、自由意志等に関する文化イデオロギーの共通性が存在していたことが分かる。そしてマクダウェルによれば、そのイデオロギーは、ホールだけでなく、やはり独立派のJohn Miltonにも共有されていた。ミルトンは後にクロムウェルの共和政府でラテン語秘書官を務めたが、彼もまた、スタンリーと同様の古典への深い学問的関心と、洗練された宮廷文化に対する何らかの憧憬を抱いていたことは確かである。また彼には王党派との具体的接点もあった。仮面劇*Comus*(1634)を共に手掛けた宮廷楽師Henry Lawesは、共和制期に入ってから私邸で音楽会を開催し、宮廷文化の存続に努めた堅忍不拔の王党派であったが、これらの音楽会にはミルトンの二人の甥もまた度々訪れており、ローズとミルトンの交友関係は比較的長期に亘っていたと推測されている(Spink 61-62)。またミルトンの1645年の詩集*Poems*の出版を手掛けたのは、数多くの王党派詩人の詩集を出したあのモーズリーであった。この詩集の出た1640年代半ばにおける彼の長老派嫌悪は、有名な離婚論を含むこの時期の彼の散文の著作にもはっきりと表れている。彼の攻撃のターゲットはあきらかに「離婚に関する彼の博学な論述を、放蕩で異端的として非難したウェストミンスター会議および議会の長老派たち」(McDowell 75)であっ

た。また、言論の自由を論じた *Areopagitica* (1644) のなかで、ミルトンは、長老派による宗教的抑圧を主教制やカトリックの宗教裁判になぞらえ、いまイギリスの学問の進歩を脅かしているものは、彼らの「専制的で宗教裁判的愚鈍さ」(tyrannous and inquisitorial duncery) なのだと主張した (qtd. in McDowell 75)。そしてこの攻撃の根底にある長老派への反感が、ホールのそれにごく近いものであったことは明らかである。それは、自らが無教養であるばかりか、知識へのアクセスを絶ち、統一的宗教規範により思想と良心の自由をも束縛しようとする長老派の「神政」への反感なのである。議会派による著作物の検閲は1643年に始まり徐々に強化されていったが、本論が底本としたマーヴェル詩集の編者である Nigel Smith によると、初期の検閲官は「疑問の余地なく敬神の人々」であり、そこには少なからず長老派が含まれていた (*Poems* 21)³。また、英国国教会の『共通祈祷書』に代わるものとして1645年に公布された *Directory of Public Worship* もまた、当時長老派が主導していたウェストミンスター会議が生み出した礼拝規則である。ホールは *A true account* のなかで、「非本質的諸問題において聖職者が良心につけ入るのを過度に許すこと」を「極度に危険な」行為の一つに挙げたが(6)、この「非本質的諸問題」(matters indifferent) というのは、Great Tew circle などの当時の懐疑主義的でリベラルな神学者たちが用いた用語で、神の存在や救済の真実といった本質的真理以外の蓋然的・倫理的事象を包括的に表すものであった。長老派が信仰生活の規範である *Directory* を通じ、国民の良心の自由や行動の自由を含む生活のあらゆる側面における自由を侵害しかねないという危機感がこの言葉には表れており、この危機感もまた、ミルトンが抱いたそれと同様のものであったと推測される。

ホールは1647年の詩集の世俗詩の部の最後の作品“The Recantation”のなかで、詩(特に恋愛詩)の世界から離れて政治パンフレットの世界に飛び込む決意を暗に示した。そして実際に *A true account* は書かれたわけであるが、それは必ずしも彼のスタンリー・サークルからの決別を意味しなかったし、また実際に彼が詩を捨てたわけでもなかった。1649年にハンティンドン伯爵の跡取り Henry, Lord Hastings が夭折したさい、スタンリー・サークルのメンバーであるブルームはその追悼詩集 *Lachrymae Musarum* を編纂したが、そこには数多くの王党派詩人の作品と共にホールの作品が収められた。興味深いのは、その彼の作品の直前にマーヴェルによる追悼詩も収められていることである。さらに言えば、次章で論じるラヴレイスの詩集の推奨詩の中にもホールの作品があり、そこでも *Lachrymae Musarum* におけるマーヴェル/ホールという作品の並びは踏襲されている。ホールは議会派に転じた後、「変節」の批判を一方で受けつつも、その親王党派的文化イデオロギーによりスタンリー・サークルとの関係を保ち続けた。そして、マーヴェルがこのサークルの中でホールと同じような位置づけで想起される詩人であったとすると、それはマーヴェルの「変節」の意味合いにも大きく影響する問題である。

2. “To his Noble Friend Mr Richard Lovelace, upon his Poems”

リチャード・ラヴレイスはいわゆるルネサンス的な宮廷人の最後の一人であったと言えるだろう。1618年にケント州の由緒あるジェントリーの一家に生まれ、オックスフォード、ケンブリッジ両大学で学んだのち宮廷に入り、詩や戯曲を書く一方、1639年のチャールズのスコットランド遠征にも加わった。文武に秀でていただけではなく、とびきりの美男子で人徳にも優れていたという。時代が内乱に向けて動き始めるなか、1642年にケント州のジェントリーたちを代表して王党派擁護の嘆願書を議会に提出し、それにより短期間ではあるが投獄を経験した。釈放後は資金を募って兵力を集め、1645年にオックスフォードに本拠を移していた国王軍に合流した。オックスフォード陥落後は大陸のフランス軍に加わっていたが、1648

年に帰国し、その後、再びいわゆる Malignant として投獄された。彼の詩集 *Lucasta* はこの投獄中に彼が草稿を整えたと推測されている。1649年に釈放されたが財産のほぼ全てを失っていた彼は、1658年に世を去るまで、過去の友人たちを頼って赤貧の生活を送ったという (*Poems* 18)。

詩のタイトルの To his Noble Friend という記述からも、マーヴェルが彼と面識を持っていたことはほぼ確かであろう。最も早く見積もれば、ラヴレイスがケンブリッジに編入学した1637年にマーヴェルはすでに同学の学生であったため、交友はこの時期から始まっていた可能性がある。また、フランスで、あるいはそこから帰国して再度投獄されるまでの期間にも、スタンリー・サークルの内外で何らかの交流があったとも考えられる。

ラヴレイスの詩集 *Lucasta* は、1648年の2月に書籍出版登記組合の認可が下りてからその出版までに一年余りを要しており、スミスはその理由を、ラヴレイスの釈放が1649年の4月であったことと、この著作の検閲作業の遅れに帰している (73)。マーヴェルがこの推奨詩を書いた時期は、詩の中にその手間取ったらしい検閲そのものへの皮肉な言及が見られることから (lines 21-32)、1648年から翌年のいずれかの時期と考えられる。当時の検閲のあり方に対する攻撃を含む詩がなぜ出版されたのかについて、スミスは、マーヴェルのそれを含む一部の推奨詩が、本体の活字が組まれた後に「前付け」として挿入されたため、検閲官の目を逃れた可能性を指摘している (*Poems* 18)。

この詩は、ジャンルの分類においては、Sir、で始まり署名で終わる正式な書簡詩 (poetic epistle) で、マーヴェルはホラチウスの *Epistulae* の形式をある程度忠実に模倣したらしい (*Poems* 19)。最初に語られるのは、明言こそされていないものの、同時代のイギリスの文学文化が抱える病とその衰退である。

Our times are much degenerate from those
Which your sweet Muse with your fair fortune chose,
And as complexions alter with the climes,
Our wits have drawn th' infection of our times. (lines 1-4)

(我々の時代は、あなたの優しい詩神があなたの順調な成功とともに加護することを決めたあの時代に比べ、ひどく墮落してしまった。そして、風土により人々の色艶も変わるように、我々の文才は我々の時代の病に感染しているのだ。)

ジャンルからの連想で、「あの時代」には、ホラチウスの活躍したローマが暗に重なってくるものの、より直接的には、それはチャールズの宮廷をラヴレイスの文才が飾った時代である。その時代は「最も称賛に長けた者が最大の称賛を得た時代 (Who best could praise, had then the greatest praise)」(line 7) であり、「慎み深い野心の女神 (Modest Ambition)」(line 9) が、「自らにではなく、それに相応しい人々に榮譽を授けること (To honour not herself, but worthy men)」(line 10) を探求した時代である。そして、そのような時代はもはや過ぎ去り、我々は以下のような「時代の病」に感染している。

These virtues now are banished out of town,
Our civil wars have lost the civic crown.
The highest builds, who with most art destroys,
And against others' fame his own employs. (lines 11-14)

(これらの美德は、もはや都から追放され、我々の内乱はあの市民救命の冠を失った。最高の技量をもって破壊する者こそ最高のものを打ち建て、自らの名声を利用して他の者たちの名声を貶めるのだ。)

スタンリーたちが守ろうとした宮廷の文学文化は、言うまでもなく、宮廷や有力な貴族たちがパトロンとなることで成立していた文学文化であり、その第一の特徴は、常に何らかの称賛や恭順の意を、古典の

知識や神話的イメージによる洗練をもってそのパトロンに伝えることにあったと言える。最高の称賛者こそが最高の称賛に値するというこの暗黙の価値観は、しかし、内乱とともに生じたパンフレット戦争により正反対の価値観に浸食されていく。「市民救命の冠」とは、詩人に授与された月桂樹の冠と並び、戦のさいに市民の命を救った者に授与されたオークの葉の冠であるが、そのような素朴な善意と寛容の精神を内乱は奪ってしまったという嘆きがここにはある。一方、自身の文才を専ら敵への非難と攻撃に向ける者たちは「毛虫 (caterpillar)」(line 15)、「武装して飛び掛かってくる昆虫の大群 (the swarms / Of insects which against you rise in arms)」(lines 17-18) に喩えられ、さらには、ほぼ邦訳不能の Word-peckers, paper-rats, book-scorpions (line 19) といった造語により形容される。この種の造語は、ホールとは知己の間柄で、マーヴェルとも接点のあったジャーナリスト Marchamont Nedham のそれをパロディーとして提示したと思われる。そしてここには、ひとつ注意しておくべき問題がある。

誰にも明らかなおと、詩人は、称賛と寛大で素朴な善意が文学から失われたことを嘆く一方で、その対極にある侮蔑的な非難と中傷の言語を自ら使用しており、これは自己矛盾としか言いようがない。ただ、当時のジャーナリズムに接していた人々は、おそらくこれが意図的なパロディーないし模倣であることを理解したはずなのである。そしてパロディーないし模倣を、他者の言語の借用を通じて間テクスト的にその他者をテキストに呼び込む行為と定義できるならば、その意味で、この辛辣な非難を行っている語り手は、詩人マーヴェルから乖離したまた別のペルソナとして仮構されているとも言える。そして、“Ode”や“Tom May’s Death”を含むこの時期のマーヴェルの作品群に共通して見られるのは、このような、詩人自身から微妙に乖離したペルソナの存在なのである。例えば、「世に頭角を現そうとする若者は、今やその親愛なる詩神たちを捨てなければならない (The forward youth that would appear / Must now forsake his Muses dear)」(lines 1-2) で始まる“Ode”は、詩と書物を捨てて武器を取れというそのメッセージを他ならぬその詩によって詠うことにより、語り手がじつは詩人マーヴェルそのものではないという暗黙の前提を読者に強いている。また、“Tom May’s Death”の大部分の語り手が、冥府でメイを迎える Ben Jonson の亡霊であることも知ってのとおりである。ラヴレイスに向けた詩の中でも、書簡詩のプライベートな語り手は、じつはいつのまにか、このような詩人とは別個の、より公的でフィクショナルな語り手に変化していく。そして、この語り手が次に矛先を向けるのは検閲官たちである。

The barbèd censurers begin to look
Like the grim consistory on thy book;
And on each line cast a reforming eye,
Severer than the young Presbytery.
Till when in vain they have thee all perused,
You shall for being faultless be accused. (lines 21-26)

(髭を生やした検閲官たちが、厳格な長老会のように、おまえの本を眺め始める。そして、あの新生長老会よりも厳しく、その一行一行に矯正の目を向ける。それから、すべてを熟読して成果が得られないとなると、おまえは瑕疵がないという理由で非難されるだろう。)

この明瞭な長老派批判、特にその権威を振りかざした恣意性への批判は、ホールが *A true account* でスタンリーをはじめとする王党派に警告した状況を具象化したもので、おそらく、マーヴェルはこのホールのパンフレットを読んでいたのであろう⁴。また、この一節の少し後に聴かれる、「戦に向かうというときに [詩なんぞを] 書いているから土地収束の憂き目を見るのだ (you under sequestration are, / Because you write when going to the war)」(lines 29-30) という検閲官の言葉は、ラヴレイスの有名

な恋愛詩“To Lucasta, Going to the Wars”に言及したもので、王党派と長老派の文化イデオロギーのあいだの、決して埋まることのない隔たりを強く印象付けている。

詩の最後のセクションは、美男子で宮廷の寵児でもあったラヴレイスを慕う女性たちが、彼の窮地を救うため、鎧もつけずに暴徒となって出撃するというかなり荒唐無稽なフィクションとなっている。同時に、その過程で、剣を握る彼の手がいかにか力強いものであったか、またその手がいかにか優しくご婦人方の手をとろけさせたか (lines 37-38) といった称賛が語られるが、これは括弧入りのコメントであり、地の文とは区別されている。おそらく、それは、ご婦人方の出陣の物語を語る仮構の語り手と、ラヴレイスの魅力を実際に知るマーヴェル自身を区別するための配慮であろう。ただ、興味深いのは、そのご婦人方のとりわけ美しい一人が、「私」を検閲官の一人と思ひ込み、恨みがましい目で睨む場面である。突然戻ってくるこの一人称は、書簡詩というジャンルの約束事としては、マーヴェル自身のはずである。そしてその「私」は次のように言って誤解を解くのである。

‘O no, mistake not,’ I replied, ‘for I
In your defence, or in his cause would die.
But he, secure of glory and of time,
Above their envy, or mine aid doth climb. (lines 45-48)

(「あ、違います。誤解しないでください。」私は答えた。「だって、私はあなた方を守るためなら、またあの方の大義のためなら、死をも厭わぬのですから。でも、あの方は検閲官たちの悪意も、私の助力も及ばぬ高みに昇って行き、栄光とその継続を我が物とされるでしょう。)

マーヴェル自身の声と、その声が語る詩集 *Lucasta* の輝かしさとその永続の確信が、この詩に書簡詩の親密さを再び呼び込み、この詩は結語へと向かう。この「手紙」を読んで、おそらくラヴレイスは、その文学的機略に感心し、またマーヴェルの友情を再確認したはずである。古典の模倣を通じた新たな文学的試みという意味で、この詩は、スタンリー・サークルが試みていた文学的営為の一環だったのかもしれない。また、素朴な善意と寛容という文学における古典的美徳の復活を求めている点も、このサークルの価値観と一致する。加えて、長老派の文化支配に異議を唱えるという点では、この詩は、ホールが *A true account* で提示した文化イデオロギーをも体現していると言えるだろう。

一方、ここに同時に現れてきた、詩人とは別個のより公的な性格をもつペルソナという問題には、更なる考察が必要である。ただ、それは後述することとし、ここでは章を改め、“Ode”と、その直後に書かれたと思われる“Tom May’s Death”を見ていくことにしよう。

3. “Tom May’s Death”

スミス の推定に従うならば、この詩は、“Ode”が書かれたのと同じ1650年の終わり頃に、それとほぼ同時を置かずにかかれた可能性が高い (*Poems* 116)。そのため、どちらも手稿で回覧されたにせよ、そのタイトルでクロムウェル支持を明確に打ち出した“Ode”の直後に、なぜこのように王党派色の強い詩を書くことができたのかは、多くの読者が頭を悩ませる問題である。

ただ、マーヴェルの政治イデオロギーの在り処は、この二つの詩のタイトルはともかく、その本文を読むかぎり、決して明確とは言えない。“Ode”は、よく知られているように、クロムウェルの武勇や戦略的手腕、また国家への献身を称える一方で、処刑を前にした国王チャールズの高貴な振る舞いにも共感を示す、政治的に極めてアンビバレントな詩である。また、“Tom May’s Death”は、その個々の言説がいか

に王党派であろうとも、それらはスチュアート朝の実質的桂冠詩人であったベン・ジョンソンの亡霊が主たる語り手となって述べているのであり、マーヴェル自身の信条、少なくともその政治信条は、ジョンソンの言葉の陰に隠れてはば窺い知れないのである。

ただ、“Ode”について一つ言えることは、この詩が称えているものが、結局のところ、チャールズ・スチュワートそしてオリバー・クロムウェルという個人であり、政体としての王政や共和制そのものについて、マーヴェルはいかなる価値判断も下していないということである。チャールズを特徴づけるものは、「凡庸なこと、卑屈なことなど何一つしなかった (He nothing common did, or mean)」(line 57) という人間としての高貴さであり、クロムウェルは、たしかに「王国を議会の足元に差し出す (He to the Commons' feet presents / A kingdom)」(lines 85-86) のだが、同時に彼は、獲物を一度仕留めてしまうと飼い主の許になかなか戻ってこないハヤブサのように、その武勇により獲得した成果には無頓着な孤高の軍人のように描かれている (lines 91-96)。少なくとも、マーヴェルが共和政体の理念そのものを正当化するの、これから4年余り経って書かれた“The First Anniversary of the Government under His Highness the Lord Protector” (以下“First Anniversary”と略記) 以降のことなのである。ただ、その政治的立場の矛盾やアンビバレンスは認めるとしても、一方で、チャールズとクロムウェルを共に称えることで、マーヴェルが、スタンリー・サークルが追求していた文化イデオロギー、つまり、詩は個人に対し、その人物への素朴な善意と恭順を示し、洗練された称賛の言葉を捧げるためのものだという宮廷文化的理念を持ち続けていたと見ることはできる。ラヴレイスに向けた詩の中で、語り手は、自らの文才を専ら政敵への非難や攻撃に費やすパンフレット作家たちへの嫌悪を示してみせた。そして、その感情は、おそらく詩人自身のものでもあっただろう。実際彼は、決してパンフレット戦争などに身を投じることなく、“Ode”を書いた後も、議会派軍の元総司令官であったThomas Fairfaxをパトロンとして詩を書き続けた。少なくともこのフェアファックスの庇護の許にあった時点までは、スタンリー・サークル的な文化イデオロギーにおいて、彼の姿勢は一貫していたのである。

さて、“Tom May’s Death”という詩は、マーヴェルの初期の風刺詩“Flecknoe, an English Priest in Rome”に連なる風刺の試みの一つであり、ジャンルの性質上、そこには攻撃的または皮肉な言説も数多く現れる。そして、彼がこの風刺詩を書いたのは、おそらく、Thomas Mayという人物が単に政治的に変節したからというより、むしろ、彼がスタンリー・サークル的な文化イデオロギーを捨てたからなのである。

メイは1630年代までは宮廷においても認められた詩人・劇作家・翻訳家であり、ルカヌスの叙事詩*De Bello Civili*の英訳などを著したが、相続の当てが外れるなどの事情があって経済的に困窮し、在野の文筆家となった。内乱当初から議会派に属し、パンフレット戦争においては議会派の言論闘争とプロパガンダで成果をあげ、その功績を認められて議会公認の歴史家として*The History of the Parliament* (1647)などを著したが、1650年の11月に死亡している。

作品は、過度の飲酒のために絶命したメイが郵便船に乗せられてエリュシオンの岸辺に辿り着き、目を覚ますところから始まる。酔って居酒屋街の路地で寝込んでしまったと思いこんだ彼は、その太鼓腹と物腰から酒屋のエアーズと思しき人物を認めるが、それは間違いで、それがベン・ジョンソンの亡霊であることを知る。

’Twas Ben that in the dusky laurel shade
Amongst the chorus of old poets laid,
Sounding of ancient heroes, such as were
The subject’s safety, and the rebel’s fear.

And how a double-headed vulture eats
 Brutus and Cassius, the people's cheats. (lines 13-18)

(古き時代の詩人の一群とともに、月桂樹が落とす仄暗い影の中に安らいでいたのはベンであった。彼らは臣下にとっての安寧、反逆者にとっての恐怖であった古代の英雄たちのことを、また、双頭のハゲワシが、人民を欺いたブルートゥスとカッシウスをいかに喰らうかを詠っていた。)

シーザーがチャールズを意味するごく一般的符丁であったため、ベンが古き時代の詩人たちと共に王政の転覆を嘆き、反逆者たちへの復讐を念じていることはすぐ理解できる。そしてそれは、宮廷人であったベンにとっては至極当然のことである。一方、自分の置かれた状況をようやく理解したメイは、この偉大な詩人の亡霊たちの仲間に加わろうと、足をふらつかせながら彼らの方へ突進していく。するとベンは、月桂樹の杖でメイの脳天を一撃し、説教を始めるのである。ベンの怒りの一つは、メイが「卑屈極まりない文士にして金目当ての物書き (Most servile wit, and mercenary pen)」(line 40) に成り下がったことに向けられている。いま一つは、彼が「ローマの人物による喩え (Roman-cast similitudes)」(line 44) を押し付けがましく使い、自由な共和制について耳あたりの良い話を人々に吹き込んだことにある (lines 43-46)。実際、メイは *The History of the Parliament* のなかで、内乱初期に議会派のために戦った三代目エセックス伯を、ローマの自由のために立ち上がったブルートゥスとカッシウスと暗に結び付けて論じており (bk.3, ch.2)、そこから、月桂樹の木陰でベンと古の詩人たちが詠っていた詩は、このメイに対する当て擦りであったことが分かる。

ベンの説教はさらに続くが、その中で最も興味深いのは、彼の次の言葉である。

When the swords glitters o'er the judge's head,
 And fear has coward churchmen silencéd,
 Then is the poet's time, 'tis then he draws,
 And single fights forsaken Virtue's cause.

.....
 But thou, base man, first prostituted hast
 Our spotless knowledge and the studies chaste,
 Apostatizing from our arts and us,
 To turn the chronicler to Spartacus. (lines 63-66, 71-74)

(判事の頭上で剣が輝き、臆病な聖職者たちが恐れのために沈黙するとき、その時こそが詩人の出番、その時にこそ詩人は剣を抜き放ち、打ち捨てられた「徳」の大義のためにたった一人で戦うのだ。・・・だが、卑しい男め、おまえはまず我らの無垢の知識と純粋な知的探究を金で売り、そして、我らの学問と我らに背いてスパルタクスの年代記作家に転じたのだ。)

すでに述べたとおり、ベンの言うこの打ち捨てられた「徳」や「大義」というのは、彼の立場上、当然国王への忠誠であり、王政主義を指している。ベン・ジョンソンの亡霊を持ち出す以上、その政治イデオロギーが王党派寄りに振れるのは誰もが予想するところである。問題は、彼のこの言説の背後に透けて見えるマーヴェル自身の現状認識と文化イデオロギーである。

判事の頭上で輝く剣のイメージは、チャールズの処刑に至った政局をほぼ正確に伝えるものであろう。チャールズの裁判と処刑は、クロムウェルをはじめとする軍部の独立派が議会を力づくで動かして断行された。スミスはこの「剣」を「判事の適法な権力 (de jure power) を脅かす事実上の権力 (de facto power)」と解釈しているが (*Poems* 123)、これは適切である。ただ、ではマーヴェル自身に、国王への

忠誠と王政の大義のためたった一人で戦う気などあったかということ、決してそのようなことはない。マーヴェルの現状認識は、“Ode”の中の次の一節に明確に示されている。

Though Justice against Fate complain,
And plead the ancient rights in vain;
But those do hold or break,
As men are strong or weak. (lines 37-40)

(「正義」は「運命」に不平を漏らし、過去の権利の回復を請うが、それは無益であり、人は強い
か弱いかにより、その地歩を保ちもすれば失いもする。)

少なくとも、“Ode”のマーヴェルを特徴づけていたものは、マキャベリ的な力の論理と運命への達観であり、彼の政治イデオロギーとは、むしろイデオロギーを「持たない」ことだったと言える。そしてこの詩においても、結局のところ彼は、自ら剣を抜くことはないのである。

さらに、「恐れのために沈黙する」聖職者たちは、おそらく、チャールズの処刑に反対した長老派の聖職者たちを指しているが、その「恐れ」は何に対する恐れなのだろうか。たしかに、この時代の人々にとって国王の処刑は「世界がひっくり返る」出来事であり、独立派や水平派に比べていわゆる穏健派であった長老派がこれに二の足を踏んだことは間違いない。ただ、長老派には、国王が処刑されては困る理由がもう一つあった。つまり、ちょうど1630年代に大主教 William Laud 支配下のロード主義者たち (Laudians) が、国王の権威の傘の下に高教会派の教会制度と文化政策を浸透させたのと同様、長老派は、彼らの教会制度と文化政策の後ろ盾として、やはり国王を必要としていたのである。彼らが「臆病な」「沈黙する」聖職者たちとして卑下されていることの背後には、長老派に対するマーヴェルのそのような冷笑的態度も潜んでいるように思われる。

ただ、最も重要であり、またベンが最も辛辣にメイを非難している点は、彼が古典の学識を党派的な政治言説に利用したことであり、それにより金銭的報酬を得ていたことである。一見するとベンは、かつて自分のように宮廷に出入りしていたメイが王政転覆に加担したこと、つまり政治的背信の咎で彼を責めているように見える。しかし、よく読めば、必ずしもそれが彼の非難の本質的な部分ではないことが分かる。彼は「無垢の知識と純粋な知的探究を金で売り」、「我らの学問と我らに背い」たことで責められているのである。宮廷詩人もまた国王というパトロンから支援を受けていたのであるから、報酬の点はともかくとして、ルネサンスにおける古典の研究は、「歴史の衰退」というトポスから生じた「知は古代に在り」という信念により、古代の「完全知」の反映である古典を模範とし、そこから「学ぶ」ことを第一の目的としていた。Our spotless knowledge というフレーズには、ジョンソンも、スタンリーも、そしてマーヴェル自身も共有していたであろう、古典に対するそのような無条件の崇敬が込められているように思われる。それは第一義的に「学ぶ」ものであり、「利用」すべきものではなかったのである。また、スタンリー・サークルがまさにそれを行っていたように、詩人の役割とは、やはり第一義的に、古典の翻訳や模倣を通じて新たな創意を探し求め、より優れた詩を生み出すことであった。それは、支援者であり庇護者であるパトロンのために詩人が行う「純粋な知的探究」であり、それ以外のものではなかった。ベンの口を借りて出たものとはいえ、これはスタンリー・サークルが存続を求めている文学文化そのものを表す言葉でもある。長老派に対する批判的態度とともに、この古典から学ぶ姿勢と詩人の役割についての理念もまた、やはりマーヴェルがスタンリー・サークルから受け継いだものと考えられる。

結び

“Ode”の前後に書かれた二編の詩を検討したうえで言えることは、マーヴェルの「変節」を、通常我々が想起するような意味での「変節」と捉えることはやはり難しいということである。その理由は、第一に、“Ode”を含むこの三編の詩には、詩人自身の政治イデオロギーを窺い知ることのできるような言説がほぼ皆無だということがある。ベン非難を受けたメイは、最終的にエリクションの岸辺から黒雲に包まれて地獄に運ばれていくのだが、この結末でさえ、ベンによる処罰の宣告とそれに続く短い客観描写で終わっており、この詩をもってマーヴェル自身の政治的旗色を判断することはやはり不可能なのである。第二に、反長老派という文化イデオロギーを介在させたとき、王党派対議会派という二極化の図式は容易に崩れてしまうという問題がある。例えば、ホールと同様に長老派を一貫して敵視していたジャーナリストのネダムは、1647年に議会派から王党派に寝返り、2年後に再び議会派に寝返った。そして王党派時代の彼も、じつは敵方のホールと昵懇の間柄だったのである（McDowell 160; Worden 76）。第三に、すでに見てきたとおり、古典を学ぶことの意義と詩人が果たす役割について、マーヴェルが、スタンリー・サークルが掲げた古い理念をこの三作を通じ持ち続けていることが挙げられる。少なくともその文化イデオロギーにおいて、彼が「変節」を遂げた形跡は認められないのである。

ただし、イデオロギーの問題ではなく現実の問題として、宮廷が失われ、私的な手稿文化が公的な出版文化に取って代わられるとき、詩人の果たす役割は必然的に変容を迫られる。マーヴェルの詩の語り手が、詩人自身から乖離した別個のペルソナへと変化し始めているのは、詩が徐々に公的言説の器へと変容し、その言説から逆算的に造形されるフィクショナルな語り手が必要になり始めたからなのではないだろうか。“Tom May’s Death”の翌年にトマス・フェアファクスに向けて書かれた“Upon Appleton House”を読むかぎり、スタンリー・サークルが維持しようとした文化イデオロギーは、マーヴェルの中に依然息づいているように感じられる。しかし、彼がその政治イデオロギーを初めて鮮明に打ち出し、新たなパトロンであるクロムウェル称賛のために“First Anniversary”を「出版」したとき、語り手としての詩人マーヴェルはほぼ完全にそこから姿を消し、その詩は明らかに「公的言説の器」と化した。結果的に言えば、やはり「変節」はなされたのである。ただ、自らと詩の語り手との間合いを慎重に測りつつ、段階的に、周到に時機を考慮しながらなされたこの詩人の方針転換が、はたして「変節」の一言で片付けられるべきものかどうかは、もはや個々の判断に委ねられるしかないのである。

注

1. 本論は平成27年度～令和2年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般））、課題番号15K02294「17世紀イギリス詩における回覧文化と出版文化」による研究成果の一部である。
2. マーヴェルの詩以外の17世紀の著作物はすべて、データベース*Early English Books Online*から入手した原本のファクシミリ版を参照した。巻数、ページ数等も原本に従う。
3. 以下、スミスが同書で述べている知見は、別途参考にした彼の著書とは別に、*Poems*の略称の後にそのページ数を記して引証した。マーヴェルの詩の引用はすべてこのテキストによる。大意の訳出はすべて筆者が行った。
4. David Norbrookは、この作品と*A true account*が示す文化イデオロギーに多くの共通点があることを指摘している（174）。

引用文献

- Augustine, Matthew C. *Andrew Marvell: A Literary Life*. Palgrave Macmillan, 2021.
- McDowell, Nicholas. *Poetry and Allegiance in the English Civil Wars: Marvell and the Cause of Wit*. Oxford UP, 2008.
- Marvell, Andrew. *The Poems of Andrew Marvell*. Edited by Nigel Smith, Pearson Education, 2003.
- Norbrook, David. *Writing the English Republic: Poetry, Rhetoric and Politics, 1627-1660*. Cambridge UP, 1999.
- Smith, Nigel. *Andrew Marvell: The Chameleon*. Yale UP, 2010.
- Spink, Ian. *Henry Lawes: Cavalier Songwriter*. Oxford UP, 2000.
- Trudell, Scott A. *Unwritten Poetry: Song, Performance, and Media in Early Modern England*. Oxford UP, 2019.
- Worden, Blair. *Literature and Politics in Cromwellian England: John Milton, Andrew Marvell, Marchamont Nedham*. Oxford UP, 2007.